

[農 作 概 況]

[水 稻]

1. 作 付 の 概 況

九州各県の作付面積は、長崎・熊本を除いた他の県はいずれも前年より僅かに減少し、特に福岡の900ha減が大きく、他の県は200～300ha減少している。しかし長崎は200ha、熊本は1,000ha、それぞれ前年より増加している。九州地域合計では422,400haで前年より700haの減少である。

早期栽培は、九州全部で36,612haであり、前年より1,984ha増加している。県別には宮崎が14,300haで最も多く、鹿児島が12,700ha、長崎・熊本は3,000～4,000haに及んでおり、宮崎は前年より1,300ha増加している。

なお「米作り運動」の推進によって、集団栽培の増加がいちじるしく、九州地域合計で51,193haに及び、前年の約2倍に達した。県別には佐賀・熊本が18,000ha内外、福岡が約6,600haである。

昭和42年産水稻の収穫量と被害量

県名	収 穫 量						うち 早 期 栽 培				集 団 栽 培	
	作付面積 ha	10アール 当り収量 kg	収 穫 量 t	前年収穫 量との差 t	10アール当り 平年収量 kg	作 況 指 数 %	作 付 積 ha	10アール 当り収量 kg	収 穫 量 t	作 況 指 数 %	集 団 数 ヶ所	面 積 ha
全 国	3,149,000	453	14,257,000	1,731,000	404	112	-	-	-	-	-	-
九 州	422,400	445	1,881,000	67,000	390	114	36,612	-	127,179	-	2,256	51,193
福 岡	91,900	504	465,200	14,000	429	117	55	371	204	-	281	6,588
佐 賀	54,500	540	294,300	▲ 2,200	465	116	1,820	426	7,750	117	747	18,421
長 崎	52,200	507	98,900	▲ 20,800	347	88	3,340	307	10,200	97	82	1,373
熊 本	77,600	486	377,100	17,100	407	119	4,210	356	15,000	110	753	18,000
大 分	53,000	416	220,500	16,900	375	111	187	347	625	107	249	4,425
宮 崎	48,800	378	184,500	17,900	319	120	14,300	370	52,900	115	55	1,271
鹿 児 島	64,400	377	242,800	24,100	372	108	12,700	319	40,500	99	69	1,115

県名	総 被 害		気 象 被 害		病 害		虫 害	
	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t
全 国	3,929,000	1,057,000	804,800	469,200	2,010,000	422,400	1,070,000	157,200
九 州	759,000	246,800	203,900	172,940	265,630	36,150	280,800	36,890
福 岡	186,700	51,800	61,100	38,700	39,800	3,160	79,600	9,520
佐 賀	73,800	29,500	26,600	23,800	19,500	2,180	27,700	3,540
長 崎	61,200	42,500	29,700	36,400	9,530	1,710	21,900	4,350
熊 本	113,500	42,600	25,400	31,600	39,100	4,770	48,700	6,170
大 分	51,800	25,500	19,100	20,900	21,200	2,530	11,400	2,000
宮 崎	94,200	22,500	19,100	9,440	52,700	10,400	22,200	2,640
鹿 児 島	177,800	32,400	22,900	12,100	83,800	11,400	69,300	8,670

注) 1. 被害面積は延面積である。
2. ▲印は、減を示す。

2 作 柄 概 況

本年の稲作期間は、分けつ初期を除いて、生育全期間を通じて高温でしかも著しく多照に経過し、特に生育中期以降は70数年ぶりの大干ばつに見舞れ、局地的には収穫皆無を見るほどの大干害も見られた。

以上のような気象経過のため、田植期の苗令は、九州全域とも平年よりやや進んでいたのと、分けつ初期がか照のため、低位分けつの発生が平年よりやや少なかったが、分けつ中・後期の多照により比較的高位の分けつが多かった。しかし分けつ後期の多照と気温較差が大きかったので、分けつ茎の発育は

良好で、九州全域ともm²当り有効穂数が増加し、特に穂数型品種の多い北九州の増加が大きかった。このように穂数増にもかかわらず、もみ数決定期の気象が特に良好であったのと、各県の米増産運動の指導による穂肥施用の適正化により、一穂全もみ数も平年並かやや増加した。このため、穂数・一穂全もみ数の増加によりm²当り全もみ数が十分に確保された。

9月上旬は最高気温が連日34～35℃を記録するほどの高温のため、出穂期は平年より1～4日早まり、開花授精は順調であった。9月中旬以降気温は平年

並となったが、多照で気温較差が大きかったので、全もみ数の増加した割には初期登熟は順調であったが、登熟中期は相対湿度の異常低下が続いたので、登熟は一時伸びなやみを示した。しかし登熟後期も多照のため、結果的には干害の著しい北九州の一部（長崎）を除いては、全もみ数の増加した割には登熟は良好であった。

このように穂数・全もみ数の増加と、登熟も比較的良好であったので、干害の著しい北九州の一部を除いて、九州全域とも大豊作となり九州地域平均の10アール当り収量は豊作の前年を更に16k上回る445kgを示し、作況指数114%で、収穫量も1881,000tを記録し前年よりも67000t増加した。

10アール当り収量の増加割合は干害の大きかった北九州よりも、南九州の増加が大きい、これは宿命的な台風被害がなかったことと、「米作り運動」の成果があげられる。

〔 陸 稲 〕

1. 作付の概況

作付面積の全国計では前年より約10%減少し、九州地域の合計では前年より15%の減少を示している。県別には、熊本・大分県で5～7%減、他の県では20～25%の減少である。

昭和42年産 陸稲の収穫量と被害量

県名	収 穫 量					被 害 量							
	作付面積	10アール当り収量	収穫量	41年収穫量との差	作況指数	総被害		気象被害		病害		虫害	
						被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量
全 国	113,600	171	194,400	▲25,000	90	127,000	62,900	80,500	53,300	30,200	7,770	13,300	1,440
九 州	48,900	114	21,500	▲8,500	70	29,132	15,362	15,311	14,253	7,053	632	6,223	445
福 岡	91	19	17	▲78	16	91	97	91	97	-	-	-	-
佐 賀	50	44	22	▲75	34	98	53	62	51	14	1	22	1
長 崎	688	7	48	▲208	5	763	992	688	985	-	-	75	7
熊 本	7,290	70	5,100	▲4,480	43	8,030	7,630	6,520	7,500	570	75	936	50
大 分	2,650	56	1,480	▲2,730	38	3,180	3,050	2,460	2,940	719	113	-	-
宮 崎	2,410	174	4,190	▲1,520	98	4,170	1,330	1,440	1,100	1,560	140	1,100	85
鹿児島	5,910	181	10,700	500	108	12,800	2,210	4,050	1,580	4,190	303	4,090	302

注) 被害面積は延べ面積である。

2 作柄概況

北九州では、7月下旬以降の長期干ばつにより、干害の被害が甚大で生育は不良となり、穂数・全もみ数が激減し登熟不良で、収穫皆無田が続出し作柄は不良であった。南九州の早期陸稲は、初期生育より順調で、穂数・全もみ数を充分確保し、登熟も良好であったのと、台風被害がなかったので、作柄は良好であった。しかし普通期陸稲は干害の被害が著しく、穂数・全もみ数の減少と、登熟不良で作柄は不良であった。このため、早期陸稲の多い鹿児島（早期作が63%）の作況指数は108%を示しているが、宮崎（早期作が49%）の作況指数は98%にとどまった。

〔 麦 類 〕

1. 作付の概況

麦の作付は近年全国的に減少の一途をたどり、九州でも4麦合計の作付面積は前年より16000ha（8%）減少し、ついに20万haを割り195100haとなった。麦別にみるとビール大麦が前年より2100ha（11%）増加したほかは、小麦が10300ha（8%）大麦は183ha（26%）、裸麦は7600ha（12%）、それぞれ前年より減少した。これらの減少面積は、果樹、野菜、飼料作物などへの作付転換や、耕地の減少に伴うもの等の外、大部分が休閑となっている。

昭和42年産 麦類の収穫量と被害量

県名	小 麦					大 麦 (6条大麦)					ビール大麦 (2条大麦)				
	作付面積 ha	10アール 当り収量 Kg	収穫量 t	前年収穫 量との差 t	作況 指数 %	作付面積 ha	10アール 当り収量 Kg	収穫量 t	前年収穫 量との差 t	作況 指数 %	作付面積 ha	10アール 当り収量 Kg	収穫量 t	前年収穫 量との差 t	作況 指数 %
全 国	357,000	272	969,800	▲70,200	104	94,800	347	329,000	▲55,100	108	110,300	307	339,100	11,300	104
九 州	118,400	211	249,300	36,300	89	515	210	1,080	▲ 370	100	21,100	209	44,000	3,300	92
福 岡	32,200	239	77,000	10,400	89	17	166	28	▲ 17	96	1,700	252	4,280	200	95
佐 賀	14,000	198	27,700	▲ 800	73	2	223	4	▲ 12	86	3,340	216	7,210	1,560	77
長 崎	9,050	228	20,600	8,200	85	72	175	126	▲ 92	93	218	257	560	319	113
熊 本	27,400	176	48,200	9,700	83	49	198	97	▲ 24	97	4,110	194	7,970	1,320	85
大 分	14,200	263	37,300	3,800	97	308	225	693	▲ 184	102	153	280	428	206	102
宮 崎	7,980	180	14,400	1,400	107	63	192	121	▲ 42	97	1,720	230	3,960	630	105
鹿 児 島	13,600	177	24,100	3,600	112	4	150	6	▲ 2	115	9,860	199	19,600	▲ 900	100

県名	裸 麦					4 麦 合 計		
	作付面積 ha	10アール 当り収量 Kg	収穫量 t	前年収穫 量との差 t	作況 指数 %	作付面積 ha	収 穫 量 t	前年収穫 量との差 t
全 国	144,900	248	359,100	▲34,900	96	707,000	1,997,000	▲ 149,000
九 州	55,100	214	117,800	▲12,400	89	195,100	412,200	26,900
福 岡	2,600	222	5,770	▲ 990	93	36,500	87,100	9,500
佐 賀	1,980	256	5,070	▲ 670	91	19,300	40,000	▲ 100
長 崎	14,500	226	32,800	▲ 1,900	81	23,800	54,100	6,500
熊 本	10,900	186	20,300	▲ 3,500	85	42,500	76,600	7,500
大 分	10,300	274	28,200	▲ 1,500	98	25,000	66,600	2,300
宮 崎	6,790	193	13,100	▲ 700	103	16,500	31,600	1,300
鹿 児 島	8,030	157	12,600	▲ 3,100	90	31,500	56,300	▲ 400

県名	4 麦 合 計							
	総 被 害		気 象 被 害		病 害		虫 害	
	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t	被害面積 ha	被害量 t
全 国	813,600	247,400	434,400	175,500	346,200	65,100	24,500	4,080
九 州	337,500	97,130	150,360	64,020	179,500	30,530	6,349	2,195
福 岡	65,900	21,000	31,300	17,300	31,300	2,280	3,080	1,220
佐 賀	35,100	16,300	20,200	14,200	13,900	1,550	822	500
長 崎	42,000	15,500	14,100	6,680	26,600	8,370	1,210	416
熊 本	83,300	24,000	41,400	15,300	41,500	8,710	465	30
大 分	31,500	7,570	19,200	6,000	12,400	1,580	—	—
宮 崎	26,100	3,670	6,660	1,210	18,900	2,440	535	18
鹿 児 島	53,600	9,090	17,500	3,330	34,900	5,600	237	11

2 作 柄 概 況

は種期は、佐賀・熊本・宮崎の各県で前作物の収穫期遅延や気候不順のため1週間内外おくれたが、その他の県では概ね平年並には種した。12月～2月には、しばしば寒波にみまわれ、気温の低下が著しかったため、生育はおくれ、分けつの発生もおくれて莖数は少なかった。穂数は発生莖数の減少と節間伸長開始期から出穂期までの長雨により有効莖割合

が莖数の少ない割に低下したため減少した。しかしながら宮崎、鹿児島では長雨の影響が比較的小さく平年並の穂数が確保された。

1穂の粒数は穂数の減少にともない、大麦、裸麦では各県とも平年並かやや多かったが、北部九州の小麦は少なめであった。

登熟は、出穂後一時高温、多湿な日があり、赤かび病の発生をみたが、5月中旬以降晴天がつづいた

ため、被害は一部を除き一般に平年より少なく登熟はおおむね良好であった。

このように42年産麦は冬の低温と春の「なたね梅雨」の影響が大きく、作柄は北、中九州の各県は悪く、南部の宮崎、鹿児島では良好であった。

〔 かんしよ 〕

1. 作付の概況

作付面積は全国的に前年より減少し、九州地域合計でも前年より6%減を示している。県別には福岡が24%、佐賀27%、熊本、大分が16~18%減、作付面積の多い長崎・宮崎・鹿児島でも2~10%減を示しており、北九州の作付減が大きい。

昭和42年産 かんしよ 収穫量と被害量

県名	収 穫 量				被 害 量		
	作付面積	10アール当収量	収穫量	作況指数	被害面積	被害量	被害率
全 国	214,400	1,880	4,031,000	94	253,000	788,500	18.5
九 州	122,600	1,920	2,355,000	93	171,500	557,000	22.0
福 岡	1,610	986	15,900	64	2,130	8,320	33.5
佐 賀	1,480	960	14,200	51	2,160	16,800	59.8
長 崎	18,300	1,090	199,500	58	22,700	186,800	54.3
熊 本	9,700	1,240	120,300	65	12,400	85,100	45.7
大 分	3,380	1,100	37,200	66	4,090	24,400	43.3
宮 崎	25,000	2,420	605,000	113	35,700	62,500	11.6
鹿児島	63,100	2,160	1,363,000	100	92,300	173,100	12.8

注) 被害面積は延べ面積である。

2 作柄概況

挿苗期の5月中旬~6月下旬にわたって九州全域とも降雨少なく、干ばつ気味に経過したので、挿苗は平年より若干おくれ、苗の活着が悪く、初期生育は不良であった。この傾向は特に北九州が南九州よりも著しかった。

7月上旬にかなりの降雨があつて、干ばつは一時期解消したが、その後肥大開始期(8月上旬)以降肥大最盛期の10月中旬まで(南九州では9月下旬まで)が、記録的な干ばつ状態がつづいたため、地上部の生育が不良で、いも個数が少なく、その肥大が悪かった。

10月中旬以降は干ばつも解消したが肥大は少なく、

作柄は干害の軽かった南九州は平年並かやや上回る結果を示したが、北九州各県は干害が甚しく、作柄は不良であった。

〔 春植ばれいしよ 〕

1. 作付の概況

作付面積は全国計で、前年より6%減少し、九州地域合計でもやはり前年より5%減を示している。作付減少の理由は、価格事情、労力事情、自給事情などにより作付を減少した農家が多く、水田裏作の減少率が高い。

昭和42年産 春植ばれいしよの収穫量と被害量

県名	収 穫 量				被 害 量		
	作付面積	10アール当収量	収穫量	作況指数	被害面積	被害量	被害率
全 国	174,100	2,040	3,551,000	113	98,100	169,400	5.4
九 州	15,400	1,580	211,900	105	11,115	14,600	7.2
福 岡	1,970	1,450	28,600	-	2,540	3,800	12.5
佐 賀	822	1,370	11,300	-	1,370	2,840	21.2
長 崎	3,860	1,800	69,500	-	3,770	4,720	7.4
熊 本	1,530	1,560	23,900	-	999	1,250	5.2
大 分	829	1,450	11,900	-	326	205	1.8
宮 崎	998	1,450	14,500	-	550	530	3.9
鹿児島	3,390	1,540	52,200	-	1,560	1,290	2.9

注) 被害面積は延べ面積である。

2 作柄概況

植付期から、ほう芽期にかけて、気温は高目で多照のため、生育は進み開花期は平年より2~5日程度早まった。

5月中旬以降が、多照か雨に経過したため、九州各地とも、地上部・地下部とも生育は良好となり、病虫害の発生も少なく、地上部の枯れ上りもおそかったため、作柄は良好であった。

〔 だ い ず 〕

1. 作付の概況

九州地域の作付は 13550 ha で全国の約10%をし

めている。地域内では熊本、大分、長崎の3県に60%を作付し、北部九州の福岡県、佐賀県は少ない。

この作付は前年より20% (3450 ha) 減少しており、特に熊本県の減少が著しい。

2 収穫量

九州地域の収穫量は10680tで全国収穫量の6%に過ぎない。県別には熊本県が最も多く九州総収穫量の約30%をしめている。鹿児島県、大分県、宮崎県がこれに次ぐが、福岡県、佐賀県は極めて少ない。

3 作柄の概況

☉ 夏 だ い ず

は種期当時は平年に比べ気温が比較的高く、加えて降水量が多かったので発芽は良好であった。その後生育前期間は高温多照、か雨に経過し生育は順調で着花結実とも良好であった。しかし、結実以降は干ばつぎみとなり登熟が阻害され、干ばつが著しかった北部九州の作柄は不良であった。

☉ 秋 だ い ず

発芽は比較的良好であったが、その後7月中旬から10月中旬まで続いた大干ばつによって節数、分枝数、着花結実、登熟が阻害され全般的に作柄は不良で、特に秋だいの作付の多い北部九州の被害は著しかった。

だいの作付面積、収穫量および被害量

県別	作付面積 ha	10アール 当り収量 kg	収穫量 t	作況 指数 (平均値)	前年との比較		被害量		
					作付面積 ha	収穫量 t	被害面積 ha	被害量 t	被害率 %
全 国	141,300	135	190,400	105	▲27,500	▲8,800	80,500	15,500	8.3
九 州	13,550	79	10,680	71	▲3,450	▲8,450	13,970	5,100	26.9
福 岡	1,080	75	810	65	▲110	▲700	1,690	555	41.0
佐 賀	1,180	72	850	65	▲320	▲890	2,240	664	48.9
長 崎	2,290	48	1,100	51	▲610	▲1,570	2,610	1,550	71.2
熊 本	3,670	85	3,120	71	▲1,120	▲3,060	2,100	817	18.6
大 分	2,520	68	1,580	62	▲550	▲1,550	2,200	1,080	42.7
宮 崎	1,540	116	1,550	92	▲240	▲80	1,070	164	9.7
鹿児島	1,670	100	1,670	98	▲500	▲800	2,060	512	18.4

注) ▲は減少を示す。

[な た ね]

作付面積は毎年減少しているが、本年も前年に比べ、14%減少した。県別には、福岡の減少が多く次

いで、大分、宮崎、熊本である。最も作付の多い鹿児島ではほぼ前年並であった。作付減少はほとんど水田裏作の不作付である。

作柄は植付後の12月～2月まで低温のため草型は小さく、分枝の発生も少なく生育は不良であった。この冬期低温の影響は北部九州で大きく、南部九州では少なかった。

昭和42年産「なたね」の収穫量

県名	作付面積 ha	全前年 対 比 %	10アール 当り収量 kg	収穫量 t	前年収穫 量との差 t	作況 指数 %
全 国	54,200	82	146	79,200	▲15,400	98
九 州	28,270	86	128	36,300	▲2,070	99
福 岡	3,930	56	126	4,950	▲1,170	97
佐 賀	2,250	82	107	2,410	▲340	84
長 崎	1,650	92	132	2,180	0	102
熊 本	3,010	82	111	3,340	▲790	88
大 分	1,420	61	126	1,790	▲1,100	99
宮 崎	1,810	73	134	2,430	▲770	111
鹿児島	14,200	99	135	19,200	2,100	104

登熟期間は高温、多照に経過したため、登熟は良好で、例年収量を左右している菌核病、黒斑細菌病の発生が極めて少なかったため作柄は別表のとおり、九州全体としては前年並で、県別では宮崎、鹿児島が良く、佐賀、熊本が不良であった。

[果 樹]

本年もまた寒気がきびしくて所によっては柑橘類が昭和38年以上の寒害をうけたところも多かった。原因の一つとして、ミカンブームに乗りすぎて不適地にまで植えられたことがあげられる。ことに甘夏橙の不適地栽植が多く、これらは果実に苦味を生じ、ス上り、続いて落果にまで及んだもののがかなりあった。

本年は気象的に全く多事多難な年であったが、なかでも特筆すべきことは70数年ぶりといわれる大干ばつである。大体において4月下旬から乾きはじめ、梅雨の盛りに雨が少なくて、7月上旬だけはすごい集中豪雨があり、7月上旬から再び乾きはじめて、例年であると必ず降雨をみる8月下旬～9月上旬も

乾き続けて無降雨は10月中旬にまで及んだ。産地では灌水にまさに涙ぐましいまでの努力が払われたので、多数の枯死は免れたが、樹勢の衰弱は甚しく、またミカンの果実は極めて小玉で、従って大減収であった。品質的にも外観が菊花状をした異常果が多く、(きくみかん)、内容的にも糖度は高かったが酸味もまたごく強いもので、しかも長らく減酸しなかった。また、さらに干ばつ後の降雨で浮皮もはげしく、それらのミカンは貯蔵も困難なものであった。しかし、宮崎あたりから南大隅半島に及ぶ範囲ではほぼ順調に降雨があり干害が少なかった。

一方落葉果樹では、4月中旬～6月下旬に雨が少なかったから、いろいろな種類が実止りがよく、その後の乾燥はあったが、カキ、クリ以外のものではミカンに比べ収穫期が早いので干害は少なく、却って少雨のため恐ろしい病気がなく、また日照時間が多いため内容品質もよく、好成績であった。しかし、カキ、クリなどの収穫期の遅いものはミカン同様干害を被った。すなわち、カキは小果が多く収量があがらなかった。とくに5月下旬筑後地方を襲った雹害は局部的ではあるがカキに大被害を与えた。クリも同様でしかも品質が悪かった。

12月下旬になってひどい低温があり、ミカンの採取は終っていたが、樹に相当の被害があった。

〔 そ 菜 〕

一般にそ菜の生産は冬の異常寒波、夏秋季の大干害など異常天候の影響が著しかった。

まず1月中旬の60数年ぶりという異常寒波で、九州全般に促成そ菜は生育、収穫がおくれ、低温障害が各地にみられ、とくに北九州の促成イチゴ地帯の被害が大であった。この異常寒波によりハウスは大型化の方向へ、暖房機は積極的に利用する機運が高まった。

3月から温暖になったが、下旬から4月にかけて多雨が続いたため、苗物は徒長し、ハイイロカビ病、エキ病などの発生が激しかった。

5～6月は比較的乾燥が続く、果実の着果はよく、病気の発生は少なく、豊作となった。しかしトマト

は尻腐れ病の増加が目立った。5月下旬筑後地方の一部にひょう害があり、早熟そ菜、採種そ菜が被害をうけた。

8月から10月にかけて、南九州を除き、70年来の大干ばつに見舞われ、ハクサイ、ダイコンなど秋まきそ菜は種まきができず、また植付けたものも生育が阻害され、サトイモ、シヨウガ、ニンジンの肥大が悪く、5割以上の減収となり、野菜の価格が暴騰した。灌水の効果がとくに顕著にみとめられた。また乾燥によってハスモンヨトウ、ハダニ、アブラムシの異常発生がみられ、夏秋季のキュウリ、トマトのウイルス病(CMV)の発生が多かった。またイチゴ苗の発生悪く、作付面積が減少し、またダナーは年内の不時開花が多かった。

11月から降雨が続く、水田裏作のタマネギ、イチゴの活着、生育はほぼ順調であったが、12月中、下旬の異常寒波で、促成イチゴの奇形果が続出した。

〔 花 き 〕

冬一春の気候は例年より多少寒い日が多かったが、花きの生育には大差が無かった。

5月下旬に福岡県久留米市東部と佐賀県鳥栖市を結ぶ地域に降雪があり、花きのうち特に観賞樹が被害をうけた。特に大きな被害のあったものはツツジ苗、スギ、ヒバ類の枝物で、ツツジの小苗では枝折れのため枯死したものが多くみられた。

その後梅雨あけまでは一般に順調な生育をみた。7月末から10月中旬まで九州全域に亘ってほとんど降水がなく約2ヶ月に亘って干ばつ状態が続いた。熊本県天草郡大矢野町の露地キクは生育不良となり、冬出し草花も作付が遅れ、草丈が短かく、収量も半ばに達しなかった。一方八女市の電照ギクは水田を利用した作付で適当な灌水が行われたが草丈が約20%短かくなった。空中湿度の低下のためと考えられる。病害の発生は少なかったが、虫害ではハスモンヨトウが大発生した。

花木類の苗木の干害が各地にみられ、特に長崎県下では甚しかった。久留米地方でも濃度障害の形でかなりの被害をうけた圃場があった。

〔 飼 料 作 物 〕

飼料作物の栽培面積は、大家畜飼養農家戸数の減少と、1戸当たり飼養規模の拡大とが相殺的に影響し、大きな変化はみられなかったが、裏作期間借地利用による飼料作物栽培面積の増大、大規模草地開発など内容的にはかなり変化がみられた。

気象条件の飼料作物栽培に及ぼした影響は5月下旬に至るまでは、あまりみられず、むしろ、イタリアンライグラスの乾草調製は、順調に行なわれた。しかし、それ以後は草の再生が弱まった。春まきトウモロコシも6月上、中旬に生育が停滞し、青刈り用ソルゴーには干ばつの影響は比較的少なかったが、茎の硬化が早まり、茎の下部の利用度は落ちた。

秋まきのイタリアンライグラスやカブのは種期は20～30日おくれたところが多くなり、12月下旬の降雪は生育をさらにおくらせた。

永年草地の草生も夏から秋にかけての産草量が例年よりも低下し、標高の低いところほど干ばつの影響は大となった。新たに造成された草地においても、種期のおくれ、発芽の不揃い、冬の凍上などにより年内の発育がおくれただけでなく、株の密度も減じ、来春の生産も低下することが予想された。

このように、天候による影響は大きかったが、病虫害の異常発生はあまりみられなかった。

〔 酪 農 〕

九州での牛乳生産量は前年に対し105.2%となり、前年までより伸び率は鈍化した。全国の伸び率を上廻った。これは、新らしく造成された草地への乳牛導入や、多頭化の進展などによる。しかし干ばつにより、夏以後粗飼料の不足が深刻化し、ビートパルプ、ルーサンペレットなどの他地域からの導入やいもつる、野乾草の入手に努力がなされ、急場をしのぎ得たが、一部地域では、これら粗飼料価格が高騰した。

なお、前年度まで飼養頭数の減少をつづけていた肉用牛の飼養頭数は、牛肉価格の高騰により僅かな

がら増加の方向に転じ、ことに南九州では増加の傾向が目立ち、ところによっては林地放牧など省力飼養進展のきざしがみえ始めた。しかし、全般的には、肉用牛飼養は零細規模から脱せず、そのため、天候の影響や飼料作物収量減の影響は表面化しなかった。

牛肉価格の高騰は、乳牛価廃用牛価格にも影響し、これが乳牛価格そのものも引き上げる作用をすると同時に、雄子牛の肉利用をも推進した。また、乳牛飼養の多頭化は、子牛の共同育成の機運を高め、乳牛価格の高騰は、この機運を推進する役割りも演じた。

乳用牛、肉用牛ともに、特別注意しなければならない病気の発生はみられなかった。

〔 養 豚 〕

前年来低迷をつづけていた豚価も本年6月から持ち直したが、九州での豚飼養頭数は総数で、前年比(8月現在)85%、子取用母豚数は77%と減少し、淘汰が進行した。

飼養品種としては、南九州では従来のパークシャー種からパークシャー種とランドレースの一代雑種が大勢をしめ、北九州では、ランドレース、大ヨークシャー種、ハンプシャー種などの大型品種間の一代雑種の生産が始められるようになった。

昭和42年に問題となった豚の病気としては、肉豚に流行性肺炎が発生し、かなりの被害がみられた。

なお、肉豚の出荷方法として枝肉の冷凍車輸送が活発となり、このため、産地価格と市場価格との間の格差が縮められた。

〔 養 鶏 〕

養鶏では規模の大きい養鶏家数の増加、零細規模養鶏家数の減少が進み、品種としては、肉鶏、外国鶏の飼養が増し、トップクロス(外国実用鶏×国産鶏)も一部出まわり始めた。

養鶏界においては、本年度もニューカッスル病の対策が最も重要な問題となり、生ワクの使用も一部に実施され始めた。

〔 茶 〕

一 番 茶

本年の冬季は寒気厳しく、その被害が一部みられたが、3月中旬以降の気温は高目に推移し、雨量も多かったので発芽は促進され、前年より3～10日早く発芽期にはいった。その後低温、多雨、日照不足などで生育は停滞した傾向はあったが、4月下旬に天候は回復し、生育は順調に進み、摘採期は川南では前年より遅かったが、他の主産地では3～6日早かった。新芽の状態および収量はこれらの気象条件に影響され、熊本、嬉野、八女では芽重は軽く収量は減少したが、知覧、川南では芽重は重く収量は多かった。

二 番 茶

二番茶の生育期間中の気温は高目で、雨量は少な

く晴天乾燥気味の天候が続き、前年より3～7日早く摘採期にはいった。しかし雨量は6月中旬まできわめて少なく、異常干ばつ状態を呈し、知覧、川南ではその影響はみられなかったが、熊本、嬉野、八女の被害は大きく、芽重は著しく軽く収量は20～30%少なかった。

三 番 茶

二番茶終了後の気温は前年より高目で、しかも7月にはいったからの雨量が多かったため芽の生育は順調で、摘採期は4～10日早かった。

前茶期における干害、その後の雨量の影響がみられ、熊本、川南は芽重あるいは芽数の減少で減収したが、知覧、嬉野、八女はこれら両形質は増加し収量は多かった。

なお九州における著名な茶産地の摘採期および10a当たりの収量を示すと次のとおりである。

地名	年度	一 番 茶		二 番 茶		三 番 茶	
		摘採期	収 量	摘採期	収 量	摘採期	収 量
		月 日	Kg	月 日	Kg	月 日	Kg
知 覧	昭 42	4. 27	441. 6	6. 15	515. 7	7. 26	400. 0
	昭 41	4. 30	334. 9	6. 20	402. 8	8. 4	296. 2
川 南	昭 42	5. 12	752. 0	6. 21	546. 0	7. 28	358. 0
	昭 41	5. 9	540. 0	6. 21	522. 0	7. 24	408. 0
熊 本	昭 42	5. 3	544. 0	6. 16	375. 0	7. 27	398. 0
	昭 41	5. 6	572. 0	6. 23	552. 0	8. 1	500. 0
嬉 野	昭 42	5. 7	536. 0	6. 29	436. 0	8. 11	462. 0
	昭 41	5. 10	598. 0	7. 4	542. 4	9. 1	286. 0
八 女	昭 42	5. 8	441. 0	6. 26	360. 0	8. 1	453. 0
	昭 41	5. 14	521. 6	6. 30	533. 2	8. 10	391. 0